

浄楽寺 総合調査報告書 浄楽寺説明会の記録

— 地域史 —

2024年10月26日 場所：浄楽寺本堂

中村の地域史

大和国の絵図から

大和国の絵図（79頁）に大字名が書かれており、江戸時代から明治時代にかけてこの地域の住所が変わっています（「中村の行政区画変遷」9頁参照）が、ここから中村は多武峯と同じ十市郡だったということがわかります。江戸時代の人の感覚では同じ十市郡の中で輪蔵が移動したということです。

この絵図で示す村名は本堂再建入費勘定帳に記載があるもので、多くが十市郡の地名です。ここから同じ郡内の人々の関わりで本堂を再建したことがわかります。

近年中村の近くに中和幹線が敷設されましたが、同じように寺川も水害がないように時間をかけて、河川改修が行われてきました。特に明治以降は技術が進み、河川改修の規模も大きなものとなりました。

また道路が敷設され車社会になるまで、遠隔地への主な運搬は舟によって行われていました。このことから、輪蔵の部材が山間部の多武峰から大八車によって運ばれたのではなく、寺川を使って舟で運ばれたのではないかと考えています。

以下は想像ですが、明治元年に奈良では大洪水があり飛鳥川と初瀬川が氾濫して床上浸水の記録（大正3年「風水害史」）があり、寺川周辺も同様に氾濫したため、明治15年の本堂再建に至ったのかもしれない。

本堂再建入費勘定帳



「本堂再建入費勘定帳」（67頁）をご覧ください。北村長四郎さんの名前があります。こちらにおられる方のご先祖かもしれません。どうやって輪蔵の部材を運んだかを見てみます（80-81頁）。

明治15年10月に「本堂修繕目録見帳」、「本堂再建入費勘定帳扣」が作られ同年12月12日に「多武峯ニテ輪蔵買入代渡ス」とあります。

担当者として佐平治、喜平、長治さん等が手分けして、買いに行った人、御礼しに行った人、手土産を買ってきた人、チームで部材を中村に運んだ人の動きがわかります。

例えば、15年12月12日付けで「長尾（当麻）大工與市繪圖賃渡ス」とあり、輪蔵の部材を使って造る本堂の絵図面を書かせています。また同日「引鉋大工足料」とあり多武峯で作業したこと、また「桜井にて魚代 中村へ輪蔵はこび」「八井内村ニ而魚代 但シ大工四人」、「百之市村ニ而酒喜拂」、「川合三人泊り中飯代」（昼食を食べて泊まっている）からは多武峯から桜井に行ったこと、つまり外山【とび】経由の寺川に沿って運搬していることがわかります。

さて、明治20年の奈良県の統計書に、平地の道路巾は3.6～5.6m、山間部は平均2mほどの道幅とあります。また大正7年の新聞には多武峰街道で米五俵を牛車に乗せて運んでいたが、幅四尺の土橋から牛車ごと転落したという記事が掲載されていることから、山間部における大型建築部材の運搬は難しかったのではとしました（78頁）。

勘定帳は、ルートと運び方、十市郡の村々との関わり、中村の人々の費用負担や助け合いの結果、本堂ができたことがわかる資料です。

（有限会社ワーク 西山真由美）

勘定帳にはお金のことが細かく書かれていて、廃仏毀釈で解体した寺の建物を使ってお寺を再建した貴重な資料といえます。

（有限会社ワーク 山川均）



近世の『大和国』絵図

